



二人で休暇

白いレースのカーテンを通して漏れ入ってくる5月の朝の光を顔に感じて、より子はものうく目覚めた。今朝二度目の目覚めだった。

いつもの6時の起床の時刻に（目覚まし時計を止めていたけれど）一旦自然に目が開いた彼女は、休暇を取った日の朝だということに思い至り、もう一度眠ろうと決め込んだのだった。

こんな時の（二度目の）眠りへの束の間の快樂は、より子の胸を子供っぽい幸福感で満たして、傍らの夫の存在すら意識せずにそのまま自然に眠ってしまった。もちろんいつまでも眠れるわけもなかった。

より子の結婚以来の習い性が自然に目を覚まさせるのだ。几帳面な夫の性格に合わせて、普段の休日も二人は大抵午前8時までには起きて朝食を摂る習慣になっている。より子は正面の壁の、角型の掛け時計を見、その8時までに5分ほど間があるのを確かめた。

傍らに眠る夫の毛深い腕をそっと自分の腋から押しやって、しみじみと眺めてみる。筋肉質とはとてもいえない。

白皙のどちらかというとな性的な細いつくりだったが、ただ、おびただしく群生する黒い剛毛だけがその性別を主張しているようだった。啓一さんは肉体労働者ではない。

より子は自分を納得させるように心の中でつぶやいた。その肉体は確かに貧弱

かもしれないけれど、でも男らしさを証明させるだけの筋力、体力は十分に備えている……。

何度かの二人連れ立っての北アルプス登山の経験で彼女はそれを実感していた。夫の彫りの深い横顔に視線を移す。

より子の一番好きな夫の眺めだった。目が開いていたらもっと素敵なんだけど、眠る夫もそれなりにいいんだ……。純粹な日本人に間違いはなかったが、黒い瞳を別の色に置き替えれば、啓一は南欧系のポー・ギャルソンといった趣の精悍さがある、と常々より子は夫にそんな誇りを持っている。

ただし横顔だけ。正面から初めて見詰めあったとき、思わずより子は笑ってしまっただけだ。

横顔のシャープな印象に比べて、啓一の正面から見た顔は、決して滑稽というほどではなかったが多少間延びのした、良く言えば愛嬌のある、最近よくテレビで見るコメディアン（ほら、ちょっとあくの強い、多弁でゼスチュアたっぷりな美女に迫っていつては振られる、偽悪的で、どうも憎めない）を想起しないでもない、つまり期待した二枚目スタアには遠く、ハンサムともいえない、バランスの悪いつくりの顔があるだけだった。

もっとも、より子はそれで落胆したわけではなかった。

それはそれでまた気にいってしまったのだったが、より子の暖かい視線を感じたのか啓一の目が開き、彼女の方へ顔を傾けた。

微笑して見詰めるより子の目をもの問いたげな表情でしばらく眺めたあと、ゆっくりと視線を移して相手の胸を眺める。薄いダブルの夏布団は二人の腹から下を被っているだけで、より子のあおむいていても形の崩れない尖った乳房はむき出しになっていた。

「何を見てるの？真面目な顔をして……。エッチ……。」

笑い顔を変えずに、より子は布団を胸の上まで引き上げた。啓一は一旦、壁の時計をちらりと眺めたあと更に真面目な顔を彼女へ戻し、手を女の肩の丸みに添わせ、ゆっくりとその細い二の腕をなぞりながら布団を押しつけて再びあらわにしていった。

しかしより子は両手を胸の上の布団から離さなかった。

夫の顔をながめながらも一度同じ言葉でなじった。啓一は表情を変えず低く応じる。

「何が『エッチ』だよ。いまさら出し惜しみすることもないじゃないか。」

「いいじゃあないの。どうせ今日は堪能するほど見せてあげるんだから。わざわざふたり揃って休んだのもそのためでしょう?。」

笑顔のままより子はこちらから続ける。

「不真面目なんだよ、おまえは。今日一人で、何をしようとしているのか、分かっているのか?。」

俺が今、自分の芸術について、どれほど悩んでいるか、想像出来ないだろう。何も分かつちゃあいないんだよ、おまえは。だから『極楽とんぼ』だっていうんだ。」

より子はちよつと戸惑ったような、しかし、何か楽しいことを期待するような笑みを浮かべて啓一の本を見た。

「なあに?その『極楽……』。」

「分からののか。おまえのことだって。」

「ふふん、まあ、自分でもわけの分からないことを言って……。」

含み笑いをしながら肩で上半身を起こして啓一の方に寄ろうとした、傍らに残っていた右の手のひらにより子の体重がかかり、男は小さく悲鳴をあげた。

「つつ、骨が刺さった。」

痙攣的に手を引いた啓一の顔を眺めながら、より子はけたたましく笑った。

「……そら、『エッチ』な手に『ばち』が当たった……。」

切れ切れにやつとそれだけを言ったより子を睨んだ啓一は、いまいましげに舌打ちしてからゆっくりと身体を起こし、妻を抱きにかかった。

より子も自然に布団から抜いた両手を男の背中へ回していく。起き抜けの抱擁の習慣は二人にはなかった。普段の二人の休日はお互いに異なっていたし、

第一、明るいとところでの行為を嫌う啓一は、いつも灯りを消してからしか挑んでは来なかったからだ。だから今朝の啓一の行動はより子には新鮮に思えた。

昨夜の長く激しい営為から既に八時間を経っていた。

最初の接吻と同時に密着させた男の身体はより子の素裸の内腿あたりに鈍い異物の衝撃を与えて、啓一が既に臨戦状態になっていることを彼女に悟らせた。

より子は片手を相手の背中から下半身へ滑らせていき、その充実したものを手のひらで掬うようにして確かめた。

しかし、より積極的な女とはうらはらに、男は短い接吻のあと溜め息をつきながらも抱擁を解き、下腹部の女の手をゆっくりと振り払って、あっさりと布団から出ていこうとする。

「あら、どうして?」皮肉っぽい笑顔で、啓一は軽い不満顔を見せたより子を見詰め返した。

「おまえこそ『エッチ』じゃないか。カメラは正直なんだぜ。二十二才が二十八才に見えてもいいのか?」

「いいわ。」

底抜けの笑顔で身体を起こしたより子は既に上半身を起こした啓一の背中へ甘

えるようにむき出しの胸をあずけて腕を絡めにかかる。しかし三十二才の夫はもう、十才年下の妻を相手にしなかった

。さっさと立ち上がって隣の部屋へ入っていく。二人の衣類の入っている整理ダンスがある、より子の部屋だった。啓一が思い留まったのにはいくつかの理由があった。

より子を疲れさせまいという配慮もあったがそれ以上に、禁ることで彼自身の創造意欲が減退することを恐れたのである。

今朝は肉体的にも、精神的にもベストの状態で臨みたい。束の間の快樂に身を委ねるよりも、後々持続する『作品の創造』という良質の快樂の方を選択したということであろうか。

なまの性欲がひとの芸術的感興にどのような影響を与えるものか、彼は深く考えたことはなかったが、直感的に、強い生命力、意思力が創造意欲に積極的な役割を演じていることは疑いがないと思っていたし、単なる老廃物の排泄とは異なつて、性的交歓が一時的にせよ、著しく意思力を消耗することも知っていた。明日誕生日を迎えるより子の二十二才最後の日を記念して、今日は彼女のヌードを撮るために、二人揃つて休暇を取ったのである。

揃つてとはいっても二人の勤める職場は、お互い所在も職種もまるきり異なっていた。啓一は丸の内一流企業のヘッドオフィスだったし、より子はマンションのある八王子のオートクチュールの店の針子だった。

もつとも、彼女は本来の手仕事より、店のマヌカンとして働く時間の方が長くなっていたのだが。二DKのマンションには二人の専用の寝室はない。布団はその点便利だった。くるくると縦に丸めてユータリティに押し込むと、即座に部屋はダイニング兼リビングルームになる。

あとふたつの部屋は二人の専用の仕事部屋、あるいは書斎になっていた。脚が折り畳める低いテーブルを隅から引き出して二人で朝食の準備をする。

朝食といつても、一斤の、厚切りの食パンとバター、それにパックの牛乳が揃えば、あとはトースターを柵から降ろすだけだ。

下着にガウンを引っかけただけの啓一、そして起き抜けの素裸の上にネグリジエをまとつたより子は幾分か無口になつて朝食を執つた。

緊張していたのかもしれない。啓一は妻に、はつきり『ヌード』を撮るとは言っていないかった。しかし妻の裸を撮るのはこれが最初ではなかったし、暗黙の了解はあった。

初めてのヌード撮影だった去年の誕生日は啓一が連休だったこともあり、早朝の箱根をロケーションしたのだった。寒かったし、より子は屋外で裸になるのを恐がつて、結局ホテルに戻って撮り直すことになった。

箱根まで行つても、屋内で撮るのだったら自分のマンションでも変わらないし

安上がりだ。(もつとも、ホテルの部屋はそれなりに二人の生活の臭いのついたマンションとはムードから異なっていた。

調度品も華美な、日常から浮いた感じがあつて、面白い雰囲気絵が作れたのだつた。結局、二人の本音は形而下の問題に尽きた。

つまり最近買った車のローン等が家計を圧迫して、ホテルの料金の都合がつかなかったのだ。(そんな話を一人で交わした後、この日の計画が具体化したわけだつた。

「汗かいちゃつた。シャワー浴びるわ。」

朝食の後片付けをしながらより子がぼつりと言つた。

「そうだな、隅々までよく磨き上げておくんだよ。」

「ねえ、一緒に入らない？背中流して欲しいのよ。」

「いい歳して甘えるなつて。こつちもいろいろと準備があるんだ。のぼせるほど入つてちゃ駄目だぞ。最後は冷水で仕上げるんだ。きりつと肌を締めてくるんだよ。」

「まあ、ひとの身体をざるそばか何かと間違えているんじゃないの？」啓一は社会人になつてからカメラを始めた。学生時代からの山好きで、最初は山岳写真ばかり手掛けていた。写真雑誌のコンクールに入賞してからは病みつきになつた。今でも山行きにはカメラを欠かさない

。もつとも、それほど機材に凝らない啓一は、いわゆるマニアックで高価な写真機を揃えているわけではない。

ニコンFに始まつた35ミリ一眼レフの大衆化時代(彼はそれをセコハンで手に入れたのだが)にどつぷりとつかつて、数台のカメラを大事に使いこなしてきた。特にオリンパスのOM-1は小型で山歩きにも簡便であることから、初期から長く愛用している。だから、ブローニイなどの中型カメラは(欲しかったけれど)持つていない

。半面、AEやAFなどの自動化の流れには抵抗がなく面白く思ひ、積極的に取り込んだ。今はミノルタの(アルファ)7000を愛用している。ただ、アマチュアとしてひととおりの現像、引き伸ばし設備の類いは揃えていて、ニDKのひと部屋を占領しているのは剣沢の小屋から去年撮つた剣岳などの全紙パネル写真も含めた、そういったおびただしい彼の趣味の作品群と機材だつた。ヌード撮影に興味がなかつたと言えば嘘になる。

一度馴染みのカメラ店に誘われて撮影会に参加したことがあつた。

しかし潔癖な啓一は、缶ビールばかり呑んでろくにシャッターを切るうともしない一部の野次馬的参加者に嫌悪感を催したあと、その手の会に参加するのをやめてしまつた。

まして、このテーマに絞つて自分でスタジオを借りるほどの意欲も持たなかつ

たので、啓一の作品にヌードはずっとあらわれなかった。

より子との結婚が啓一の意識を変えた。彼の属する山岳クラブの海外遠征参加のチャンスを得て振って（ヒマラヤのトレッキングの計画のために積み立てていた個人資金を崩して結婚費用にした）。

会は啓一抜きで去年ネパールへ行った。その代償として自分の前に現れた最初で最後の見事な美人との結婚の機会をものにしたのだという、ひそかな、自虐的ですからある意識が、彼女を作品にして収支を合わせたいという潜在意識に裏側でつながったのかもしれないが、まあ、啓一自身の潜在意識はさておき、写真のことを言い出したのはより子の方からだったことも事実だ。彼女は啓一の趣味を誰から聞いたのか、よく知っていた。

「写真を撮ってくださいる？明日、はたちになるの。そう、今日がいいわ。十代最後の記念にね。」

大学OB合同の山岳部コンパの流れ会で、たまたま同席した男女のグループの会話の中で啓一のカメラの話が出たのだった。

顔は見知っていたが（彼女はどうみても場違いな、怠惰な部員の一人だった）二人がお互いにプライベートに話し合ったのはそれが最初だった。

しかも年齢のことが出て、多少気に留めていた女が意外な若さであったこと、（より子は化粧もうまく、仲間内をリードするほど大人びて快活で、どうみても二十三、四には見えた）啓一が頼み込んでも得られないほどの機会を向こうから作ってくれたことで、そのときは複雑な衝撃を受けたことを彼は記憶している。

旅行でのスナップとかいうのならともかく、誕生日の記念に写真をねだるといふ行為は通常の、若い世代の感覚からも浮いているようで、『新鮮な発想』だといえればそれまでだろうが、見方によっては美人であることを鼻にかけた、露出癖に顕示欲の重なった自信過剰な女と取られかねないだろう。

まさに啓一はそんな気持ちで、いささか裏切られた気分を受け取ったことではあった。しかし、明るいより子には、彼女がそれを言えば周りは誰もが許せるという雰囲気があった。

彼女の同性の友達もそんなより子を無条件で賛美しているように思えた。啓一ほどその場で内心驚き、幾分抵抗も感じた人間はその場にはいなかった筈だが（同性は皆彼を嫉妬したはずだ。より子は心情的には最も遠い異性に声を掛けただけだ）、一転、夢中になった時も、気がつくとは彼は仲間の先頭を駆けていた。半年後に二人は結婚した。

夜の公園で彼女のポートレート撮ってやったことが機縁になって、啓一はその後何度か交際を申し込み、強引ともいえるスピードでまとめてしまったのだ。趣味のカメラを買うにつけても何度となく異なった店を回って慎重に機

種を選ぶ性格の啓一自身にも意外なほど、この恋愛は考える時間が少なかったし、脇目もふらず走ってしまったという感が強かった。

しかしそうだった男の情熱と執着が最初はそれほど乗り気でもなかったらしい彼女を動かしたのは確かなようだった。

啓一には女遍歴はほとんどない。だから常識を備えた若い女がどれほど足元を見詰めているか、そして機会がくれば、いかに思い切つて、目先の楽しみよりしっかりと個人的人生設計を描くものかを、彼自身余り知らなかったのだった。

二度目のプロポーズにはつきりと同意した女に驚き、数日続いた幸福感のあとひそかに、ほとんど後悔に近い思いをした日もあったくらいだった。

彼は懷疑家だったし、こんな形で自分が結婚に踏み切ることになるうとはしばらく前までは夢にも考えてはいなかったのだ（信州の親元からの見合い話を二度断つてもいた。）。

より子は大学を辞め、二人はお互いの親しい友達十名が集まつた会費制のパーティで披露を済ませた。もつとも、結婚して一年半が過ぎて、例の二才の誕生日の前日に撮つた、“記念碑的な”と彼女のよく言う平凡なポーズの組写真も含めて、彼の撮つたいくつかのより子のポートレートを今ながめると、彼が初めて見て驚き、熱く理想化して記憶し、そしていつも思い浮かべていた当時の彼女自身の顔の印象とそれは少なからず異なっていることを実感するのが最近の啓一の気持ちの変化だった。

異なっているというより、最初から承知ではあつたが、冷静になつて見れば気になり出したと言つたほうが正確だろう。

彼女の、生きいきと強く張つた双重の瞳が印象的な顔の中心に座る、仰向き加減の短い鼻がその主な原因だった。正面からみれば可もなく、不可もなく目立たないだけだったが、横顔ではその鈍重さは否定出来なかつた。

もつとも、人によっては可愛い形だと言つかもしれないし、それから続く鼻下線の微妙なやわらかいつくりと、わずかにめくれあがつた愛らしい上唇がそれを補つて余りある一種の魅力を放つていたので、全体としてよく調和のとれた顔になつてはいたのだが、啓一はより子のことを掛け値なしの美女だと認めることには、多少とも気後れするようになっていた。

もちろん、今でも啓一はより子の大柄な肢体に見合う小さな顔の个性的な造作を大層魅力的だと思つている。

彼女と街を連れ立って歩くときははれがましき、誇らしさは当時と変わつてはいないし、多くの視線に舐められるより子は、それですます魅力になつていくように思えるのも、啓一にはうれしいことではあつた。

彼女はいつも一人で充足しているように見え、そしてそれは完璧な眺めだった。

少なくとも啓一はそう思った。脚が自慢で、ミニ・スカートやショートパンツを好んだ。

それだけでなく、素肌を見せる機会をのがさなかったが、しかし露出趣味がいやらしく感じられなかった。

部屋にいるときなどは、さりげなく胸を大きくあらわにしていることもしばしばだった（より子はブラジャーを嫌い、滅多に身につけなかった）。そして、それらは啓一の目には、セクシーである以上に美しいものに写った

。稀な美しさだと思い、印象が尾を引いた。より子のヌードを撮りたい、と思ったのは、だから自然な発想だった

。結婚して半年が過ぎようとする頃、啓一はあらかじめ二人で計画していた旅行にそれを絡めることを、彼女の誕生日を口実としてその場の思いつきのよう
に提案したのだった。

もちろん、啓一が最初から考えていたことだった。われながらぎこちないと感じた妻へのヌードモデルの依頼は、あっけなく受け入れられた。そして結果は期待した以上のものだった。

しかも、容姿の見事さだけではなく、高校時代にテニスのインターハイに出たという彼女は運動神経も並み以上で、啓一が要求する以上に、自分でよく工夫してポーズを造っていくセンスもなかなかのものをもっていた。

啓一は至福を感じた。より子がシャワーを使っている間に啓一は撮影の準備を始めた。南に面した窓を閉め、白いレースのカーテンを閉じる。四階のマンションは常に向かいの棟の十階建ての同じ作りの建物の住民（その四階以上の）から眺められる可能性がある。

しかし外光はカットするよりむしろ積極的に採り入れたかったし、より子さえ気にしなければ問題はないのだった。四台のカメラと交換レンズ群を含む機材を書斎から出してくる。大小の三脚や小型の脚立、リフレクタとして使う白いパラソルやランプスタンドを並べると何の家具もないリビングルームは急に狭くなった気がして啓一は溜め息をついた。

背景を隠すための白いスクリーンを広げているところへ、バスタオルを腰に巻いたより子がヘアドライヤーを手に入ってきた。

「髪、洗っちゃった。半乾きだけど、何か注文があつて?。」

おとなしいフリルのついた長めのスリッパをまとったより子を自然光の中に立たせて、啓一は撮影を始めた。

実に、より子は乗りやすい性格ではあつたけれど、最初からオールヌードではぎこちなくなるのに違いなかった。

コスチューム撮影とはいっても薄いナイロン地の肌着で、その下には何もつけていなかった。照明の角度によっては裸と変わらない。それでもより子には

よほど気楽になれるようで、自分から様々に動いてポーズをつくってくれる。途中からわずかに股下にかかるくらいの短いキャミソールに着替えて撮り続けた。

超ミニのスリップのようなキャミソールは、おとなしいデザインのものでしたが、啓一は後の撮影で肌にゴム跡が残るのを嫌い、ペアになったパンティをつけさせなかった。より子の伸びやかな下肢はその切り詰めた衣装から思いきりよくはみだして、この狭いスタジオではその全身を歪曲させずに、猥褻に見せずにうまく撮ることはなかなか難しいことだった。

より子はその表情豊かな多重まぶたの瞳をいつものように潤ませて、口元からは微笑みを絶やさない。

それでも一連の動きを続ける間に微妙な心の変動があつて、本当に啓一が気に入る表情を保つ時間はわずかな間なのだった。いきおい連写がちになる。あらかじめモノクロームを入れたニコンF以外の、三台のカメラ全部に装填しておいたりバーサルフィルムの三六枚撮りフィルムを、またたく間につかっってしまう。

リバーサルフィルムにしたのは、スライドにして二人で楽しむためである。最初のころは二人の間での秘密を守るためにモノクロームに限っていた。

自分で現像、引き伸ばしをする喜びはもちろんあるが、それも啓一の楽しみに限ったものであり、より子はそれらの秘密主義を『ねくら趣味』だといって笑い、気味悪がった。

そういえば、より子の明るい肌、あくまで明るい性格はカラーフィルムが似合っているようだった。リバーサルフィルムは、露出に気を遣う苦労はあるが、うまくやれば色彩の再現性はプリント用の比ではない。

もちろんASA四 のもので、今日のような晴天では屋内でも特に強い照明は必要ないことを啓一は経験から知っていた。もっとも、現像所に仕上げを依頼するためには余り冒險的なものは撮れない。

猥褻罪のおそれありとされてフィルムを没収され、返せ、返さぬで裁判沙汰になった素人写真家の例もあるのだ。閉め切っていたし、五月の強い日差しとタングステン照明が室内の温度を高め、より子の肌を汗ばませていた。

休憩しよう、と三脚の上から啓一が言うと、より子は床に広げたシートから立ち上がり、あやういコスチュームの裾を押さえて、隣りのキッチンでコーヒートを沸かすために部屋を出ていった。

数分も経たないうちに湯気を立てた二つのカップを盆に載せて運んでくる。啓一はエア・コンのスイッチを入れてより子を待っていた。

「わあ、涼しい。」

そついいながら啓一のそばに並んで腰をおろす。むきだしの脚を前で合わせてぱちんといわせ、長い腕で抱き込んだ。座り込むとより子の腰から下はまった

くあらわになってしまふ。

既に啓一はハイアングルからより子の乳房を要求して随分撮っていたが、まだ撮れば可能だった下半身の叢を意識してフレームの外においていた。

もつとも、コスチュームを通してなら何枚かは写っているはずだったが、肩を触れ合わんばかりに寄り添ったまま二人はコーヒーターを無言ですすった。

彼女がこの位置を選んだのは、ずっと眺められっぱなしだったより子の、啓一の視線からわずかの間にせよ逃れるための束の間のわがままな息ぬきのようなものだったのかもしれない。

「おかしいな。」放心したように前を向いてカップを傾けていたより子をゆっくりと見詰めながら啓一はとぼけたような調子で言った。

「何がおかしいのよ?。」

「それ、おまえの言うインター・ハイだよ。こんな細い肩でよくラケットが振れたもんだって感心してたんだよ?。」

「ええ、痩せてて悪かったわね。アスレチックにでも通って、西脇美智子のようになむきむき姐ちゃんにでもなった方がよろしくて?。」

「いや、痩せているというほどでもないんだな。これはこれで、女らしくて悪くはない。被写体としては申し分ない。むしろ欠点がなくてアングルに苦労する位だ。」

俺のいうのはつまり、それ、テニスひじって言うだろう。やっぱり中高でテニスしてた知人を知ってるんだけど、右と左が、長さから違うんだ。『しおまねき』だって自分でいってたけど、ほら、片方だけハサミの大きな蟹のこと。それからすれば、おまえの腕は全然らしくもないんだな。まだ一緒にテニスをしたことがないし、……。本当に選手だったのかい?。」

「ま、このひと疑い深いのね。嘘なんかつかないわ。一度証明してやるわ。もつとも、現役時代は短かかったの、私。中学ではお遊び程度で、高一から始めたようなものだったから基礎がなかったし、当然ラリーは苦手だったけど、上背があったので前衛に回されたの。ソフト・テニスは前衛、後衛で大抵それぞれ専門になってしまふのよ。でも秋の新人戦では意外にも一年生でひとりだけメンバーに入ってしまったわ、補欠だったけど。私、ひとのラリーを潰すのは得意だったのね。」

「それは分かる。おまえの性格が出るよ。そうか、軟庭だったのか。軟式は前衛ならそのポジションしかやらないからな。それにゴムボールだから力もいらないわけだ。」

「それでもないわ。硬式のように当てるだけでラインアウトしてしまうほどボールに反発力がないから、思いきり振り抜いてドライブをかけないと球速が出ないのよ。球にスピードがなければ、大抵はうまい前衛の餌食になってしまうの。軟式の前衛も、試合じゃレシーブをする機会はあるので、ラリーの練習は結構したんだけど、当然腕が太くなって、おまけに短くなって、嫌になったので二年目でやめちゃった。一年も経たずに力こぶも、肩の丸みも元どおりよ。」

「それでよかったよ。女はスポーツなどで男のような身体になるべきじゃあない。女は優雅でなくちゃ。所詮おんなはどうあがいたところでスポーツでは男には勝てないんだ。どこかの国のステートアマのように、男性ホルモンを注射して勝つなんていうのは全く邪道だし、結局、スポーツは男性の世界だということの証明以外の何でもないだろう。ともかく古代オリンピックなどでは、女性も競技場へも入れさせなかったんだ。」

「まあ、男尊女卑もはなはだしいこと。見せることもしないなんて。黄色い声は男共にも励みになるでしょうにね。」

「これには理由があったんだ。競技で男は全員素っ裸になったんだって。」

「ますます見たいわ。」

「古代ギリシャではおまえなんぞ欲求不満で気が狂っちゃまうだろうなあ。ともかく、あのころの女性というのはみんな優雅で慎ましかったんだよ。」

「ねえ、古代オリンピックもいいけど、少し寒くなってきたわ。クーラー、止めない？」肌寒さを感じるほどになっていた部屋が再びゆっくりと熱気を取り戻し始めたところを見計らって、啓一はより子にコスチュームを取るように言った。しばらくはいたずらっぽく抗ったより子も、やがて素直になって後ろ向きに正座をすると万歳をするようにして脱いでしまった。

動きの止まったより子の回りをめぐりながら啓一は様々なポーズの要求で多弁になってカメラを構え続ける。うつむかせ、屈ませ、ねじらせ、シーツの上に転がせて腰を中心としたフレームを工夫していく。

素裸のより子のコスチュームは、今はただ背中の中の半ばまでを被うほどの豊かな黒髪だけだった。いや、それはアクセサリというべきほどの付加的なアクセントの効果も期待は出来なかった。

例えばその自然の装飾品は、前に垂らして乳房を隠すくらいのは出来たろうが、それは本来が肉体の一部であったし、作為的に用いるにはなまめかし過ぎる素材であった。

いつか、と啓一はその豊かすぎる黒髪を持って余しながら思った。もう少し余裕が出来たら、ヘアデザイナーを一人雇って、これをうまく生かしながらより子のヌードを撮ってみよう。

そう、来年までには。啓一はより子の微笑をストイックな無表情に変えさせ、カメラの視線をも無視することを要求した。

もっとも、この不自然な状況の中で強い緊張状態にあるヌードモデルは、微笑する余裕などはないのが普通だろう。それはより子も同様だった。しかし生硬なお互いの対応は意識して解きほぐしていくのがカメラマンの義務でもある。このがんじがらめの状況の中で、ともかくもこだわりなくお互いに自然な言動が自由に出来る雰囲気を作れたら、ヌード撮影は半ば成功したといつていいのかもしれない。

啓一とより子はその点では申し分のない関係だったけれど（そして啓一に言わせれば天性露出癖のあるより子ではあっても）、やはりこの不自然な状況の中ではぎこちなくなることは避けられなかった。

啓一は一面では、この三回目になる撮影で、なお初々しさを残しているより子を好ましく思ってもいた。夜の行為の奔放さとは対照的に羞恥心を拭い切れなかったし、むしろそういったものを意識的に捉えたいとも思っていたのだ。

もちろん、そんな状態も次第に弛緩することは避けられなかった。素裸のより子も啓一の言葉につられて微笑することが頻繁になった。笑うなよ、と言ったのはそんな時のことだった。

笑いかけるヌードは男性通俗雑誌のピンナップ写真以上のものにはなりえない、と啓一はいつも言っている。

より子の好ましい表情がたとえ、夫だけに向けられたものであったにしても、そこに生身のからだ放散するポジティブな欲情が感じられる限り、美以上にそれらセクシーなメッセージが作品を受け取る側を攪乱させ、結果として出来上がったものは普通の芸術作品にはなりえないと言っことだろうか。

しかし、コスチュームをつけたセミヌードでの女の微笑えみかけを啓一が禁じないのはどうしたことだろう。

セミ・ヌードは日常で、オール・ヌードはのっぴきなならない非日常の中での出来事であるから、微笑は似合わないともいうのだろうか。

それとも、コスチュームをつけたセミ・ヌードは芸術にはなりえず、オール・ヌードだけが芸術に近づくということだろうか、まさか？ストイックな無表情、

性を感じさせない無機質のヌード。

ただ、美だけが濃く香るおんなの裸体。そんなものが可能だろうか。美とは何だろうか。しかし、ストイックにならねばならなかったのはむしろ啓一のほうがうだった。多層のレンズやプリズムを通して対象を見詰め、そこに現出する束の間の造形美を値踏みして決断しフィルムへ定着していく。

この作業はもちろん目の前の素材に対する共感と素直な驚きがあつて初めて可能になる性格のものだろう。啓一がより子と出会ったときから間断なく続いている驚きは、そのまま彼の悦びでもあつた。

その悦びを定着させ、更に普遍の美の創造へ近づけたいという彼の夢は、より子が夫のカメラに自分の裸体を収めることを許したことで、簡単に達成出来るような幸福の気分にはたつた啓一だったが、しかし、その夢の対象はまたそれ自身危険なほどに甘く、セクシーだった。

彼が箱根で撮つた美しい妻のヌード写真の数々を前にして至福の時間を過ごしつつも、時に、これでよいのだろうかという疑問を抱くようになったのは、その中から何枚か、殊に満足できるものを雑誌の公募に応じようとした事に始まつていた。

そう、それらはいずれもまことに美しい妻の肉体ではあつたが、それ以上のものではないような気もした。

自分はこんなものを目指していたのだろうか。少し違う気がする。では、何が違つたのか。自分は何を目指そうとしているのか。妻の肉体の切り売りか。自分を含めた一般男性の覗き見趣味に迎合しようとしているだけではないのか。

単に妻のセクシーな肉体の眺めに溺れて、その再現に努めているだけではないのか。『きれいに撮つてね』とより子は言い、なるほど彼女が自分で見惚れるほどのものは撮れていたが、啓一自身それらの作品に魅惑されつつも、それだけでは必ずしも満足出来ないものがあることも事実だったのだ。

作品の中には幾つか彼女の肉体を極端にオブジェとしてイメージしたものもあった。

臀部をクローズ・アップしたもの、首を胸に埋めんばかりにうなだれた彼女を背中から撮つて、前で両手を絞つて組み合わせたためにせつないばかりに肩甲骨が浮き上がったものなど、啓一自身はそれなりに面白いとは思つたが、より子はそれらを気味が悪いといい、自分のからだとは思えない、と不快感を示すのだった。

全身像や腰を強調したものの中には、大胆にセックスを見せたものもあつた（それらは自宅で現像した）のだが、より子はそれらを特に嫌がるわけでもなかった。

それらが彼女の素材としての美しさを無視したものではないというのがその理

由らしかった。啓一自身の不満に加えて、多少とも自信のある作品がより子には否定されるといっちょくはく。

もちろん、それは自分の技量の未熟さに負うところが大きいのだろうと啓一は反省してみる。彼に抽象化の能力についての自信がないことは、主に現代のアブストラクト芸術が彼にはさっぱり面白いと思えないことに主に困っていた。自分はやはり、中村正也ばりに徹底的に通俗の線でいくしかないのだろうかとも思いつつ、啓一はなおも迷っている。

素材の美しさとは何か。セクシーな魅力と美とはどんな相関を持つのか。そう、それらは全く無関係ではないのだろう。人間が人間を素材として作り出した美という観念が、人間の感覚と感情にひとつの根拠を置く以上、彼等の本能、行動範囲から離れてあるはずはないし、ましてその肉体の生理現象(性欲の感情)と全く無関係に存在するわけもないのだ。

だが人間に男と女がいる限り、美は少なくとも二人の間の共通の言語で語られ得る概念でなくてはならないのではないか。

一方が別の性を犠牲にして成り立つ芸術が人間の普遍的財産になる筈もないのではないか。

性は美の本質ではありえないのではないか。つまりヌードの美は不可能なのではないか。女性のヌードの美があるならば、男性ヌードの美があっても不思議ではないだろうが、もし、それらが完全な共通項で括られるならセックスは美とは無関係ということになるのだろうか。だがそれは啓一にはとても辛いことのように思えた。より子のヌードを美しくないというなら、啓一の生きるよりどころはどこにあるのか。

啓一自身、男性のヌードを撮る意欲を持たないし、より子もボディビルで鍛えた男の筋肉美に実は感心することがないと言う。

その感覚に何か普遍のものを感じるのは啓一の利己主義だろうか。おんなが男の造ったフィルターを通してのみ、それをよしと感じているわけでもないのだろうか。男性美は啓一の意識の中では劣勢だった。

それは芸術が男のエゴイズムの産物であり続けたという歴史からだけで説明出来るものではないと啓一には思えた。

ひとつの説明は筋肉質の身体が物理的な機能を過剰に詰め込み過ぎた臭みが感じられるためではないか。女のヌードの美は簡素で、それ自体何の強さもない(形而下の役割を何ひとつ強調しない)純粹な肉体の持つ美とも言えた。

全ての虚飾を捨て、快樂を約束する存在としての女体の力をアップビルすることも、感情の表出すらも禁じられたより子はただおんなといういきものとしてそこに存在していた。

もちろん、言葉の芸術が言葉自身の持つ歴史的な重層性に依存するように、よ

り子自身のヌード像はより子や、啓一が意図する以前に、より子がおんなだというそのことだけで様々な想念がまつわりつき、にじみ出てくるという危険を常に内包している。

いや、秀れた芸術は常にそうなのだろう。より多様な想念が導き出される豊かな意味を備えた作品は、作家の意図を越えてひとり歩きし始めることが普通なのだが、問題は作家自身がいかにそれをよくコントロールし、思わせぶりでない、自分の意図をより強く作品を通じて観賞者へ伝えられるかということなのだろう。もちろん、それらは大なり小なり誤解される宿命を持っているのだが。作家がやらねばならない最低の努力は、それらの誤解を最小限に留めさせるために、彼の意識的な主張の最大限を作品を通して観賞者に伝えられるように、表現力の向上を、技能を磨くと共に、無意識的な意図も彼等に伝わる可能性を考慮して、より高い志をもってことにあたってゆかねばならぬということなのだろうか。

では自分はファインダーを通して何を見ているのだろうか。自分の審美感覚が何ら無意識下のフィルターを経てはいないという自信は啓一にはなかった。そう、少なくとも男性という目でより子の裸を透かし見ていることは確実だった。より子の裸体は美しい。

それは自然の造った一つの極致だとすら啓一は思う。だがそれを誰にでも納得させるための裏づけの言語を自分はまだ持っていない。啓一は焦りつつそう感じていた。撮るしかない、と啓一は思う。

自分の言語は写真なのだ。多く撮って、そしてその行為の中で金脈を見つけるのだ。もちろん、やみくもに撮るばかりではフィルムの無駄遣いというものだろう。撮る行為は啓一にとって美しいものを確たる永遠のものに定着する作業であり、より子の肉体のかたちを通じて啓一が主張する、大層個人的なメッセージでもあるのだ。

そして、それはまた、より子自身のメッセージでもあった。当然、より子の啓一への信頼と愛がなければ今日の作業は成立しなかった筈だった。啓一が懸命により子のポーズから、全身の表情から、その時々最良のイメージに共感し、それを捉え定着させていく時、それらの啓一の行為のエネルギーもまた、より子の全人格への強い愛着から生まれていることは確かだった。

だが、それは正しいのだろうか。普遍の美がただ、二人の私的な愛情の交流で達成出来るのだろうか。写真は何が可能なのか。

写真の美とは何だろうか。それは素材のある時刻の凍結的な再現と定着以上のどんな力を持っているのだろうか。

普遍の美とは何だろうか。それは果して存在するのか。結局啓一はそれらの謎の端緒にただただ、迷いはそのまま残った。迷いを残したまま、啓一は

自分の趣味に忠実に則ってやっていくしかないことを実感するのだった。所詮啓一は男性である立場から自由になることは出来ないのだし、ヌード芸術が性の観点を離れては有り得ないことも自明だと啓一は考えていた。啓一は男性であり、男の性衝動しか知らないのだ。

だとすれば、女性であるより子の感覚は啓一には想像出来ない貴重なものになる筈だった。ポーズについてはかなりの部分を彼女の自由意思に任せることが多く、またアングルについても彼女の意見を重視する啓一は、その点でより子の感性を取り込んでいるという自負心があった。

もちろん、写真はその瞬間、瞬間のファインダーでの直感芸術であり、最終的には焼きつけて見なければどんなものが出来上がっているか啓一自身にも分からないことが多く、そんな中でモデルの意思がどれほど反映されているものか。いや、映画の中の俳優の演技が単に演出家やカメラマンの手柄では有り得ないのと同義で、啓一の作品にもより子自身の肉体の主張は非常に大きなフアクターを占めているのだからうけれど。

コスチューム撮影のときには殆ど意識せずにフレームのなかに入れていたより子の顔をヌード撮影で啓一は意識してフレームから外すことが多くなっている。それは彼女の躯をオブジェとして扱っているということではあったが、また、彼女の肉体が顔の表情なしでも充分に絵になる美しさを持っているという点でもあった。

身につけていたものをすっかり落とししたより子は笑みを浮かべなくなった代わりに強い緊張が顔の表情だけでなく手足の隅々までゆきわたって、撮影は二人の緊密な共同作業であるという雰囲気が強くなっている。

それは啓一には大層好ましいものだったが、より子自身もまんざらでもないという気分なのだった。

アングルの微調整や、外光の変化に伴う絞りの変更などに取られる余計な待ち時間もより子は辛抱強く気分を高めたまま緊張を維持している。むしろ一ショットごとに気分は高まって、啓一はより子の自分に注がれ、向かってくるような熱い視線をまともには受けられないほどになっている。

やや紅潮した生真面目なより子の小さな丸顔は啓一の感情から距離をおいたために、その眉根の迫ったエキゾチックな表情がおおさらに彼には危険な美しさとして見え始めていた。だからむしろ望遠で首から下の上半身を美しいフォルムを損なわない範囲でオブジェとして撮ったり、背中から撮ったりすることが多くなる。

それも次第に啓一の要求が具体的な変化の注文をつけることをせず、間遠くなり、寡黙になっていくに従っていつものように彼女の方で自然にポーズを工夫しはじめ、啓一はそれに短い注文を付加し、また黙認しつつシャッターを切っ

ていく形になった。当然、より子の視線は啓一 の視線が覗くカメラを注視するようになる。

より子の身体が半身から殆ど正面を向き合って膝立ちになり、ややのけぞるようにして両手で髪を後ろへ梳きあげるようなポーズでまっすぐカメラを覗む。その彼女の全身を広角で見詰めたとき、急に啓一の中の何かが崩れたようだった。

「まあ、あきれた……。」

少し気が抜けたように吹き出すと、夫をなじるようなすねた視線を投げて、より子はその場に腰を落とした。

啓一のゆったりめのスラックスの前が張って、緊張が始まったことを示していたのだ。

「余り、おまえが、迫力を出すものだから……。これだから男は不便なんだな。」
休むことにした。

不慣れたアマチュアがサポーターを身につけていくという下品な冗談が啓一の場合も現実になってしまった。より子が嫌味にとらなかつたのが啓一には救いだった。

照れ隠しに、今度は彼の方がコーヒーを作り部屋をたづ。ついでにキッチン
の白い椅子を小道具にする積もりで持ち込んだ。最後は彼女にパンティを履かせて撮る予定だったが、まだ啓一はより子の全裸ヌードに執着があった。

時間をかけた割りにはひとつひとつのフレーム作りとライティングに時間がかかって、それほど数が撮れてはいなかったし、決定的なものが一つも得られていない気分だった。純白のシーツの上に胡座を組んだより子は素裸のまま
苦いコロンビアを啜りながら、よく喋り、笑った。

「ねえ、私、本当にセクシーかしら？正直に言ってー！」

「ちえっ、素っ裸のままでもセクシーかしら？もなにもあつたもんじゃないだろう。裸になって立たせなけりゃあ、おんなじゃねえってことさ。」

一緒に並んで座りなおし、肩を触れ合はんばかりに寄り添ったより子は、むしろ顔をそむけるようにして窓の外を見詰める風情の啓一を徴発するように横顔を覗き込み、笑いかける。啓一はコーヒーをすすりながら気をそらせ、高ぶりを押さえようと懸命なのだ。

「じゃあ、随分我慢を重ねてたってこと？ともかくそそれれんでしょう？セクシーなわたしのからだに

。白状なさい。それとも、痩せ我慢せずに出してしまう？ちょっともったいないけれど、手伝ってあげるわ。」

股間のジッパーに伸びた手をあわてて啓一は払い退けた。

「よせよ、馬鹿、今は駄目だ。」

『今は駄目だ』って、いつならいいのよ？。啓一さんも早く楽になって、じつくりと撮影に打ち込めるんじゃないこと？。何だか雰囲気重くて、どうも落ち着かないのよ、わたしも。」

「ポテンシャルが落ちるんだ。気力が削がれるんだよ。エネルギーなんだ、これは。済ましちゃったら写真を撮る気もなくなるだろうしね。」

より子はちよつと不意をつかれたような陰りを表情に見せたが、すぐ笑顔を取り戻し、心持ち首をかしげて啓一が投げた謎を解こうとその顔を見詰める真摯な表情になった。

「へえ、むらむらしながら撮るほうがいいショットになるの？。つまり、わたしを精一杯セクシーに撮りたいってわけ？わたしはまた、啓一さんが美とか芸術とかいう時はその正反対のことを言っているように思っていたんだけど……。」

啓一はより子の顔をまともに見詰めた。上気した顔は皮肉の影もなかった。抱かれないのだろうか、と啓一は一瞬動悸を早めた。

「おまえに限らず、裸の女をセクシーに撮るなという方が難しいよ。確信はないけれど、ピュアな女性美はそれも含んでいるのだと思う。」

だから僕は、一概にそれを無視するんじゃないやなくて、それも考慮に入れて撮ろうとしているんだ。今僕が欲情を消耗してしまったら、おまえが発散するその力を感じるアンテナが無力になるだろうから、その感受性は少なくとも撮影の間は大事におきたいんだ。もつとも、それだけを前面に押し出せば、当然同性が見て不快に思うような、一流男性雑誌のピンナップのようなものにはかならないだろうけれどね。」

いったんは収まって、また始まったカメラマンの勃起をからかって、一緒に裸になって撮ったら？などというより子の底抜けの明るさが雰囲気救っていた。

すぐ椅子を中にした立ち姿のより子を撮った。しかし、啓一はここに至って改めてより子の日本人には稀な均整の取れた肢体に驚かされるのだった。なにげなく椅子に横なりに座って脚を流したポーズでは、ローアングルにしなくても、充分に形の良い脚がその美しさを主張する。

それは立ち姿でもおなじで、S字に張った胸部の、胸の上向きの乳房からウエストへ、一旦きゅつと細まった腹部が腰の急激な充実へ向かうあたりは、より子の一番セクシーな、みごとな部分で、どの角度から撮っても悪くはなかったが、彼女の特徴はむしろ、それから下の、無駄がなく締まった、しかも柔らかくて甘い太腿から、直線的でしかも女らしい脛を経て足先に至るよく伸びた脚

線の美しさにあった

。床に腹這いになったり、上半身を起こして片脚を引き寄せたりするポーズなどでは特にその脚線は長く強調されたが、たとえば椅子に逆座りになって脚を広げるといった、いつもは嫌味に見えるポーズも、より子がこなすと自然に見えるのはそのプロポーションが力になっているのだろう。啓一はそれら、より子の明るい表情の全身像を含めた無難なものは、他人の目が触れる可能性のあるリバーサルの入ったカメラで撮り、どちらかと言えばライティングを凝って時間をかけた大胆なフレームの部分カットはモノクロームで撮ることが多かった。それらの中にはモデル自身にも見せにくいようなものも混じっていた。もっとも、彼女ならこころ笑って許すだろうが……。

手元のカメラのフィルムが終わった。二人とも疲れていたが、残る何本かのフィルムで啓一はより子のスクリーンティ姿を撮ることにした。彼は、この日のために、目をつけていた川崎の下着専門店を選んできたいくつかの超ビキニのパンティを用意していた。それぞれより子は愉しげに、身につけては笑いこぼしたが、彼女が最も気に入ったのは、前の叢のふくらみだけが辛うじて隠れる、彼女のてのひらより小さな水色の三角巾のついた殆ど紐だけのパンティだったが、叢が狭くて低いより子には充分な布の大きさだった。

股下から上へ臍の半ばへもいかない位置で水平に回し、左右の腰骨あたりで後ろから回したTストリングにつなぐ。その結び目はそれ自身スリリングな飾りになるのだった。

きつく結ばないと動けばずり落ちる不安があったが、もっとも、これが最後の撮影だったので膚に紐跡がついても構わなかった。

これじゃあとても下着をつけた気分にはなれやしない、などといいながらも、姿見の中のより子は素裸の時よりも生き生きして楽しげに見えるのだった。

事実、そのきわどいランジェリーはより子にはよく似合った。

啓一は座ったり、立ったり、膝立ちで身をよじったり、大きく股を開けて座りこんだり、奔放に動き回るより子を楽しく追いかけて、あけっぴるげに笑いかけ、また徹発的にレンズを覗む彼女の表情も含めた、通俗的なフレームを連写した。昼近く、初夏の日差しはクーラーの止まった部屋の温度をあおり続けていたが、二人は汗まみれになりながらも暑さを感じなかった。

突然手元のオートマチックが最後のフィルムのリワインドを始めていた。

「終わったよ。」

ポーズをやめて棒立ちになったより子は、一瞬羞恥心の混じった笑顔を浮かべたあと、放心したような表情で啓一を正面に見詰めたまま、息を弾ませていた。汗か、それとも興奮のせいかわからない、薄いシルク地の布片は濡れて叢と襞を透かし見せていた。

「よくやった。綺麗だった。本当に綺麗だったよ。疲れたろう。」
より子はうなづく代わりに、むしろ悲しげな顔になってゆっくりと両手を前に差しのべた。

「来て……、早く。」

啓一は驚いた。なるほど彼自身、この非日常的で禁欲的な二人の共同作業のエンディングとしては、熱い抱擁も悪くはないと思っていたのだが、より子にとってそれはもつと切実な必要性があったのに違いない。

それは、例えば啓一などには知り得ない、美しい種族がまま見る鏡の、裏側に秘められた剥離部に覗ける暗部が強いる羞恥心のうずきを、ともかくも和らげてくれる確実な愛の手触りへの渴望であったのかもしれないのだが。

逸る気持ちを押さえながら、啓一はまず近くのライトのスイッチを切り、ゆっくりと立ちすくんだままの妻の方へ歩いていった。

お互いに相手の荒い息づかいが感じられる近さに向かい合い、男は今更のように二人の肉体の不釣り合いを確かめて溜め息の漏れる思いだった。

啓一はより子の上向きに突き出た乳房を意識しながらその長い腕に巻き込まれていった。

汗ばんだ背中へ腕を回し、いつものようにわずかに背伸びをして妻の百六十七センチの背丈に自分の百六十二をアジャストさせ、それから目の前の可愛い唇を襲った。

完

編修 AKITTOY@